

足利尊氏肖像画と伯英惠儁

— 新出「足利尊氏肖像画」に記された建長寺惠儁の画讚 —

佐藤孝

新出「足利尊氏肖像画」の発見の経緯

平成二九年（二〇一七）一〇月、東京都港区芝公園の古美術店「古美術白水」の店主・寺崎正氏が所蔵する絹本着色の掛軸一幅が室町幕府初代將軍、足利尊氏（高氏、等持院殿・長壽寺殿、仁山妙義大居士、一三〇五—一三五八）を描いた肖像画として栃木県立博物館で公開され、一躍、脚光を浴びた。栃木県立博物館特別研究員の本田諭氏と鎌倉歴史文化交流館学芸員の高橋真作氏が調査鑑定し、足利尊氏の姿を描いた肖像画であることが確かめられたのである。そのことは一〇月二七日のテレビニュースなどで取り上げられ、一月一日には毎日新聞と朝日新聞に記事が載せられた。本稿ではこの新たな足利尊氏の肖像画を新出「足利尊氏肖像画」と称しておくことにしたい。

この度、見つかった新出「足利尊氏肖像画」は、南北朝・室町期に著された武家の肖像画としてきわめて貴重である。それはこの新出「足利尊氏肖像画」の上部に臨濟宗大覚派の伯英惠儁（徳俊とも、青丘遺老、？—一四〇三）という五山禅僧が讚語を付しているためであり、明確に尊氏を描いた人物画であることが確かめられ、その史料的な内容価値も高まったことに因る。ただし、新出「足利尊氏肖像画」一幅は原本そのものではないとされ、伯英惠儁が示寂して半世紀、原本作製からおよそ六〇年から七〇年ほど経た室町後期の十五世紀中葉に精巧に作られた複製本と見られている。したがって、肖像画に付された惠儁が揮毫したとされる讚語自体も直筆というわけではなく、複製時に何者かによって惠儁の讚語が書き写されたことになろう。しかしながら、肖像画讚の語句自体は惠儁が記したことをほぼそのまま書き写したはずであろうから、讚語の内容そのものを詳しく解説することによって、惠儁がこの新出「足利尊氏肖像画」に寄せた意図も読み取れるであろう。

足利尊氏肖像画と伯英惠備（佐藤）

新出「足利尊氏肖像画讚」一幅 絹本着色 掛幅装 室町時代中期（十五世紀中葉）写



私は令和元年（二〇一九）一〇月に横浜市中区根岸台の「馬の博物館」（公益財団法人・馬事文化財団）で行なわれた『企画展「名馬と武将」の図録に「新出の足利尊氏肖像画と建長寺伯英徳僞の讚」と題して論考（解説）を載せることができた。これは馬事文化財団参与の長塚孝氏より親しく依頼を受けたからであり、その際、令和元年五月には高崎市の群馬県立歴史博物館を訪れて「大新田氏展」（四月二七日～六月一日）で初めて新出「足利尊氏肖像画」をガラス越しに閲覧する機会に恵まれた。「大新田氏展」の終了後、長塚氏とともに現所蔵者の寺崎正氏のもとを訪ねて詳細に現物および付帯文書などを目の当たりに拝覧することができた。

ただ、このときの「新出の足利尊氏肖像画と建長寺伯英徳僞の讚」の論考は展示図録という限られた紙面の都合上、かなり要約したかたちの一般的な内容となっている。そのため多く調べた成果をほとんど載せることができなかつたという思いが存したのも事実であった。そのため今回、より詳細に新出「足利尊氏肖像画」に寄せた伯英徳僞の讚語について考察を加えておきたいと考えた次第である。

なお拙稿「新出の足利尊氏肖像画と建長寺伯英徳僞の讚」が『特別展「名馬と武将」の図録に掲載されてまもなく、鑑定者のひとり栃木県立博物館特別研究員の本田諭氏により「新出の個人蔵「足利尊氏像」について』（『中世宇都宮氏一族の展開と信仰・文芸』に所収、戎光洋出版、二〇二〇年一月）と題する論考もなされている。

久しく天神像として伝わる

まず、はじめに新出「足利尊氏肖像画」はこれまで何故に全く世に知られないまま現今まで伝えられて来たのであろうか。その理由として旧箱書きに「天神絵賛」と記されていること、また「天神讚」と題した付帯文書も存していることが挙げられる。天神とはいうまでもなく天神様、平安時代に公家かつ詩人として名声を馳せた菅原道真（菅公、八四五―九〇三）のことを指している。そうした事情から新出「足利尊氏肖像画」は久しく天神様を描いた肖像画と見られてきたのであり、足利尊氏の姿を描いたものとは思われて来なかつた経緯が存している。

ただ、江戸後期に記されたと見られる付帯文書「天神讚」には、肖像画讚の内容に返り点とルビが付されており、かなり正確に惠僞の記した讚語の内容を読み熟していることが知られる。付帯文書「天神讚」を記した人物は、惠僞の肖像画讚の内容

を十分に理解していたと解してよいであろう。天神様の肖像画でないことを承知の上で、あえてその人物は「天神讚」の表題を付している可能性が高いのである。おそらく江戸中期以降、朝廷に弓を引いた逆賊として足利尊氏の評価が下落していく時期に、その人物はこの肖像画を人目から隠すかのごとく「天神絵賛」「天神讚」と書き残したものではなからうか。しかもそのことが幸いしてか、この新出「足利尊氏肖像画」は幕末・明治から昭和に到る激動の時代を極秘裏に伝承され、所蔵者を替えつつ現今まで残されたともいえよう。

諸地に残る足利尊氏の肖像画と木像

はじめに従来知られている中世後期に製作された足利尊氏の肖像画と木像坐像について、栃木県立博物館編『足利氏の歴史―尊氏を生んだ世界―』（昭和六〇年（一九八五）一〇月）と同編『開館三〇周年記念特別企画展』足利尊氏―その生涯とゆかりの名宝―（平成二四年（二〇一）一〇月）と群馬県立歴史博物館編『大新田氏展』（平成二二年（令和元年）四月）および九州国立博物館編『室町将軍（戦乱と美の足利十五代）』（令和元年七月）などの解説を通して概観しておきたい。

足利尊氏を描いたとされる肖像画としては、広島県尾道市東久保町の転法輪山浄土寺（真言宗泉涌寺派）に東帯姿の絹本着色「足利尊氏肖像画」一幅が所蔵されており、南北朝から室町中期の頃すなわち十四世紀後半から十五世紀に描かれた作と見られている。また京都嵯峨野の靈龜山天龍寺には室町後期の十六世紀に描かれたとされる東帯姿の絹本着色「足利尊氏肖像画」一幅が所蔵されている。ただ、これらの肖像画には惜しいことに讚語などが付されていないため、これまで確実に足利尊氏を描いた肖像画であるとは断定されていなかった。今回新たに見つかった新出「足利尊氏肖像画」はこの二つの肖像画と風貌がきわめて似ており、その面では惠備の讚語が付された新出「足利尊氏肖像画」が発見された意義は特筆されてよい。

一方、同じく中世後期に足利尊氏の姿を刻んだ木像として、大分県国東市国東町の太陽山安国寺（豊後安国寺・臨濟宗妙心寺派）には十四世紀後半の南北朝に刻まれた東帯姿の「足利尊氏坐像」一躯が所蔵されている。この豊後安国寺所蔵の木造坐像も写实的であり、尊氏の生前か死後まもない時期に造像されたものと見られている。浄土寺所蔵の「足利尊氏肖像画」や新出「足利尊氏肖像画」とも共通する特徴として、大きな鼻や垂れ気味の目尻などきわめて類似した風貌となっている。

このほか中世後期から近世初頭にかけて刻まれた尊氏の木像が京都の天龍寺や尊氏塔所である萬年山等持院、静岡市清水区

の巨鼈山清見寺、鎌倉市山之内の尊氏塔所である宝亀山長寿寺など臨濟宗寺院に所蔵されているが、全体的な印象として、時代が下るにしたがって写実性が薄れ、顔立ちが威厳に満ちたかたちへと整えられていく傾向が見られる。

新出「足利尊氏肖像画」の紹介

初めに新出「足利尊氏肖像画」一幅について概観しておきたい。ただし、私は肖像画それも武家の画像を専門に研究した経験もないので、これまで本肖像画に関してなされた諸氏の研究成果などをまとめるかたちで、内容を紹介することにした。

新出「足利尊氏肖像画」一幅は絹本着色、縦八八・五センチ、横三八・五センチで室町時代の十五世紀中葉頃に描かれた作と見られている。この新出「足利尊氏肖像画」を収める箱書きなどに「天神像」と記されていたため、これまで世間の注目を何ら集めることもなく現今まで伝えられている。そんな本肖像画が一躍脚光を浴びることになったのは、上部に記された惠僞の讚語に足利尊氏を示す「長寿寺殿」の語句が見られる上に、また「六十六州安宝塔」や「造寺亦同宝塔数」とあって足利尊氏が仏光派（夢窓派祖）の夢窓疎石（夢窓正覚心宗普濟国師、一二七五—

一三五二）の進言で弟の足利直義（慧源、三条殿、一三〇七—一三五二）とともに行なった利生塔・安国寺の建立に纏わる事跡が記されていたことに因る。このように肖像画に描かれた主が天神様と菅原道真ではなく、足利尊氏であることは讚語の内容を読むことで明確に判明したわけである。

確かに肖像画に描かれた人物の面貌を眺めて見ると、鼻梁が



新出「足利尊氏肖像画」（部分）

大ぶりで両眼の目尻が少し垂れ気味に描かれる点などは、先に触れた広島県浄土寺所蔵「足利尊氏肖像画」とほぼ一致し、同じく尊氏のすがたを彫像したとされる大分県安国寺所蔵「足利尊氏木造坐像」（国指定重要文化財）の面貌ともきわめて類似している。これら二点の作と新出「足利尊氏肖像画」を併せ眺めると、一見して同一人物を描いたものであるかと認められる。新出「足利尊氏肖像画」は巾子冠を被り、轡唐草文の束帯を着け、手には笏を持った姿で描かれているが、本来、足利尊氏の肖像画にあるべき足利氏の家紋、二つ引きの桐文は見受けられない。絹目が粗いことから室町中期以降の画絹に近いとされる。冠に挿す筭が急角度で上に立ち上がる点も時代の下降を示しており、裾（下襲のこと）の表裏の賦彩が逆になるなど、矛盾する表現も見られるとされる。一方、伯英惠備が記したとされる讚語にも年号表記の錯誤がある上、その筆跡も惠備自身による墨蹟とは明らかに相違している。こうした点から、新出「足利尊氏肖像画」および讚語は、惠備が示寂して半世紀ほどを経過した室町時代中期以降、十五世紀中葉に模写された写しと結論づけられている。

なお、讚語の後に「逢春閣」の語が見られるが、これは後段で詳しく記すごとく鎌倉建長寺にかつて存した中国風二階楼閣客殿のことであり、北朝の貞治三年（南朝の正平一九年、一三六四）に創建されている。しかしながら、その半世紀後の応永二一年（一四一四）に逢春閣は火災で焼失しているため、本肖像画讚語の原本が製作されたのは讚語の通り十四世紀末頃であったことは間違いないであろう。そのため新出「足利尊氏肖像画」は原本ではないものの、僅か数例しか現存しない中世に遡る足利尊氏の姿を描いたきわめて貴重な作例ということになる。また讚語の末尾に記される「備陽西祖寺」とは、かつて備前福岡庄すなわち現在の岡山市東区西祖と瀬戸内市長船町福岡にまたがる地域に存した臨濟宗寺院であり、大覚派の寂室元光（円応禪師、一二九〇—一三六七）も滞在したことが知られている。西祖寺はすでに廢寺となつて久しいため、新出「足利尊氏肖像画」を所蔵していたと讚語に記される「月洲和尚」の詳細についてもほとんど消息が辿れない。

伯英惠備の画讚の翻刻と書き下し

つぎに新出「足利尊氏肖像画」に記されている伯英惠備が詠じた讚語の字句を判読してみることにしよう。肖像画に付された讚語の原文をそのまま翻刻すると、左記のようになる。

能乗多生大願力堂々示現宰官身風化何處

不相到有道有德有經綸六十六州安寶塔
神光靈輝耀無垠造寺亦同寶塔數妙嚴

莊力縱敷陳若論於世受依報門闕爵祿絕
比倫這般去就也奇特將盡大地作家珍從上

宗乘參得了摩醯正眼絕疎擲下大千於
方外當頭把斷个要津真諦俗諦摠圓融凡
情聖量一味真維摩大士何曾別神通妙用

應利塵千妖百怪盡消滅只見國土号令新
備陽西祖寺月洲和尚繪長壽寺殿尊真

請讚於老拙永留本寺以作供養
龍集康應丁卯之秋於逢春閣上

建長住山比丘惠備敬讚「朱方印」

部分的に文字が摩滅して読み辛い箇所も存するが、これを読み熟した付帯文書「天神讚」の記事なども参考にしつつ、肖像画讚に句読点を付して示してみるならば、つぎのようになるであろう。

能乘多生大願力、堂々示現宰官身。風化何處不相到。有道有德有經綸。
六十六州安寶塔、神光靈輝耀無垠。造寺亦同寶塔數、妙嚴莊力縱敷陳。
若論於世受依報、門闕爵祿絕比倫。這般去就也奇特、將盡大地作家珍。
從上宗乘參得了、摩醯正眼絕疎親。擲下大千於方外、當頭把斷个要津。
真諦俗諦摠圓融、凡情聖量一味真。維摩大士何曾別。神通妙用應利塵。
千妖百怪盡消滅、只見國土号令新。

備陽西祖寺月洲和尚、繪長壽寺殿尊真、請讚於老拙。永留本寺、以作供養。
龍集康應丁卯之秋、於逢春閣上、建長住山比丘惠備、敬讚。

惠儁の讃語は韻を踏むかたちで七言二二句より成り、綺麗にまとめられた偈頌であり、足利尊氏が生前に行なった種々の功績を称える内容となっている。さらにこれを読み込んでみるならば、およそ以下のように書き下せるであろう。

能く多生の大願力に乗じ、堂々として宰官身を示現す。

風化、何れの処か相い到らざる。道有り、徳有り、経綸有り。

六十六州に宝塔を安じ、神光靈輝、耀くこと垠り無し。

寺を造ること亦た宝塔の数に同じく、妙嚴莊力もて縦いままに敷陳す。

若し世に於いて依報を受くることを論ぜば、門閥・爵禄とも比倫を絶す。

這般の去就も也た奇特なり、尽大地を將て家珍と作す。

従上の宗乗は參得し了わり、摩醯の正眼にて疎親を絶す。

大千を方外に擲下し、当頭に今の要津を把断す。

真諦・俗諦は摠べて円融し、凡情・聖量は一味にして真なり。

維摩大士、何ぞ曾て別ならん。神通妙用もて刹塵に応ず。

千妖百怪は尽く消滅し、只だ国土に号令の新たなるを見る。

備陽西祖寺の月洲和尚、長寿寺殿の尊真を絵き、讃を老拙に請う。永く本寺に留め、以て供養を作したまえ。

龍集康応丁卯の秋、逢春閣上に於いて、建長住山比丘惠儁、敬んで讃す。

このように新出「足利尊氏肖像画」の讃語は、五山派禅僧である伯英惠儁の教養のほどが滲み出た堂々たる偈頌であり、惠儁が渾身の力を振り絞って初代將軍・足利尊氏の肖像画に寄せた力作といつてよいだろう。

肖像画に示された讃語の内容を読み進めると、尊氏が全国六十六州に利生塔や安国寺を建てたこと、仏法に深く帰依していたこと、為政者として公平なものごとを捉えていたこと、国中に号令をなしたこと、長寿寺殿を描いたすがたであることなどが全文に語られている。いずれにせよ、平安時代の菅原道真の事跡とは全く合致しておらず、一様に足利尊氏の功績を讃える讃語であることは一目瞭然に推察されるといってよい。

臨濟宗大覚派について

ところで、新出「足利尊氏肖像画」に讃語を寄せた伯英惠僞は、臨濟宗大覚派に属する五山禅僧である。大覚派とは寛元四年（一二四六）に南宋から渡来し鎌倉中期に活躍した松源派の蘭溪道隆（大覚禅師、一二三十一—二七八）を派祖とする門流をいう。道隆は西蜀涪江（四川省重慶市涪陵区）の冉氏の出身であり、虎丘派（松源派祖）の松源崇嶽（老聶翁、一一三二—二〇二）の高弟である無明慧性（惠性とも、一一六〇—二三七）に参学して法を嗣いだ南宋禅者である。

蘭溪道隆は鎌倉期に日本に渡来した最初の中国禅僧として知られ、鎌倉幕府第五代執権の北条時頼（最明寺殿道崇、一二二七—一二六三）が鎌倉山之内に創建した巨福山建長寺（建長興国禅寺）の開山第一世に迎えられている。道隆が示寂して後、朝廷から大覚禅師の勅諡号が下賜されたことから、その門流を大覚派と称している。

新出「足利尊氏肖像画」に讃語を付した伯英惠僞も大覚派に属する五山禅僧であり、その法脈を示すならば、蘭溪道隆—同源道本—了堂素安—伯英惠僞と師資嗣承している。師翁は道隆の高弟のひとり同源道本であり、本師は了堂素安（本覚禅師、一二九二—一三六〇）である。しかも惠僞と同じ大覚派に属する禅僧たちが新出「足利尊氏肖像画」と深く関わっていたらしいことも窺われる。徳僞が生きた時代、もつとも勢力を誇っていたのは夢窓疎石を派祖とする夢窓派であり、京都禅林を中心に五山派の臨濟宗教団を席卷していた。夢窓疎石は臨濟宗破庵派（仏光派祖）の無学祖元（子元、仏光国師、一二二六—二二八六）の高弟、高峰顕日（仏国国師、一二四一—一三二六）の法を嗣いでいる。南北朝期に大躍進した夢窓派に比すると、大覚派の勢力はかなり限られていたのである。しかしながら、新出「足利尊氏肖像画」にはなぜか大覚派の禅僧たちが深く関わっており、夢窓派の影響はほとんど見られないのが大きな特徴となっている。

伯英惠僞の修行期

では、新出「足利尊氏肖像画」に讃語を寄せた伯英惠僞とはどのような五山禅僧であったのか、惠僞の足跡を大まかに辿っておくことにしたい。幸いに玉村竹二『五山禅僧伝集成』（昭和五八年、講談社刊）に「伯英徳僞（はくえいとくしゅん）」の項が存していることから、その成果を踏まえて一通り紹介しておきたい。

この人は法諱(僧名)を惠備といい、史料によつては德備や德俊とも記されている。伯英とは惠備が名乗つた道号(字)であり、別に青丘遺老という雅号も存する。武蔵の人とされるから、現在の埼玉県から東京都あたりの出身であるうが、具体的な出生地や俗姓、出生年時などは定かでない。状況的には十四世紀の前半、鎌倉末期の頃に出生しているものと推測される。幼くして出家して相模(神奈川県)の鎌倉に赴いて建長寺に投じ、大覚派の了堂素安に師事して参禅学道に努めている。

素安が示寂してまもない頃、北朝の貞治年間(一三六二—一三六七)に惠備は同門の法弟に当たる大年祥登(一四〇八)とともに元代最末期の中国へと赴き、明州(浙江省寧波府)鄞県の天童山景德禪寺で松源派の了堂惟一(芥室)に参じ、そのもとで藏主の要職を務めている。惟一は松源崇嶽—滅翁文礼—横川如珙—竺元妙道—了堂惟一と嗣承する禅僧である。『了堂和尚語録』卷三「了堂和尚偈頌」には、

贈「日本俊藏主」。

单伝直指、絶学無為。頓空華藏海、抹過毗盧師。無量法門、都来在汝。百千億劫、不出今時。逆施倒用見徹、徳山臨濟還堪追。(正統藏一一三・四六九a)

という惟一が藏主惠備(德俊)に与えた「日本の俊藏主に贈る」と題した偈頌も収められている。『了堂和尚語録』卷三「了堂和尚偈頌」には「贈「日本俊藏主」のほかにも「贈「日本登侍者」(同・四六九d)と「次韻贈「日本敬藏主」(同・四七二c)と「贈「日本謙藏主」(同・四七二a)といった偈頌が存し、『了堂和尚語録』卷四「了堂和尚後録」にも「浄慈寿首座日本人、持「危宋二学士所作南堂和尚行道記語録序」見示、書「此以贈」(同・四七九b、c)と「送「日本生禅人礼「宝陀」遊「天台」(同・四八一b)が収められている。ちなみに浄慈の寿首座とは、杭州(浙江省)錢塘県の南屏山浄慈報恩光孝寺にて松源派の穆庵文康(仏頂)のもと首座を務めた松源派金剛幢下の日本僧、椿庭海寿(木杯道人、一三二八—一四〇二)のことにほかならない。また「贈「日本登侍者」は惠備とともに入元した日本僧の大年祥登のために惟一が付与した偈頌である。

いわば惠備は日本建長寺の了堂素安と中国天童山の了堂惟一という二人の了堂のもとで研鑽修行した禅者なのである。ちなみに惟一の師匠である竺元妙道(定慧円明禅師、一二五七—一三四五)は古林清茂(金剛幢、扶宗普覚仏性禅師、一二六一—一三三九)と同門に当たっている。清茂といえば元代を代表する偈頌の名手として知られ、多くの日本僧が入元して清茂のもとで参学研鑽に努め、帰国して金剛幢下の詩壇の禅風を挙揚し、日本の五山文学の隆盛に大きく貢献したことは名高い。『恕中和尚語録』

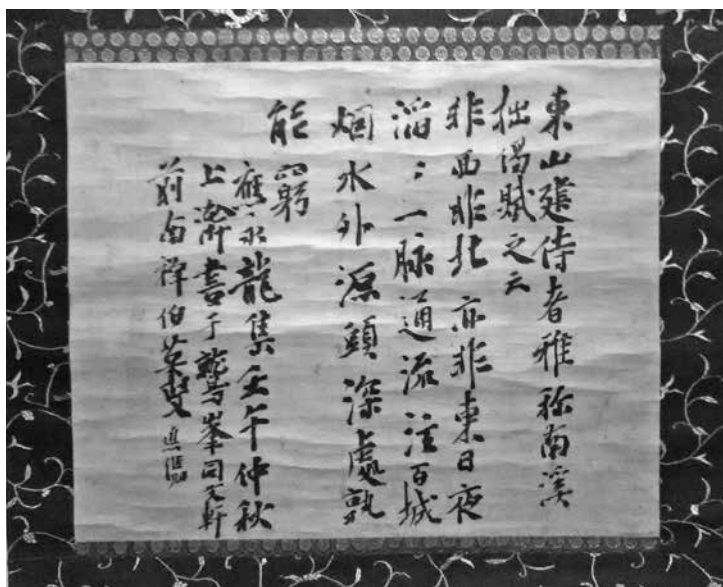
卷六「七言律」には「扶桑登侍者以偈請益、有三万里程来問、道之句、次韻答之」(正統藏二二三・四三九b)と題した偈頌が

取められ、祥登が了堂惟一と同門に当たたる恕中無慍(空室、一三〇九―一三八六)にも参学していたことが知られる。そうした偈頌を重んずる元代禅宗の流れを惠僞や祥登も惟一らを通して継承していたことになろう。

明国が建国されてしばらくした後、惠僞は祥登とともに日本に戻り、建長寺に掛搭し、まもなく前堂首座(第一座)に昇進している。ついで蘭溪道隆の墓塔(開山塔)を納める建長寺山内の西来庵(開山塔院)の塔主(守塔比丘)の職を司っている。『新編鎌倉志』卷三「建長寺」の「円鏡」の項によれば、北朝の永和元年(一二七五)二月一日に徳僞が西来庵塔主として撰述した『建長寺円鑑図紀実』一篇が載せられており、蘭溪道隆ゆかりの円鏡が円覚寺から建長寺に移された顛末を書き残している。

伯英惠僞と鎌倉・京都の五山

北朝の永徳三年(一二八三)の頃、惠僞は鎌倉の稲荷山淨妙寺(鎌倉五山第五位)に開堂住持して大覚派の禅僧として活動を開始し、まもなく瑞鹿山円覚寺(鎌倉五山第二位)の第五〇世となり、さらに巨福山建長寺(鎌倉五山第一位)の第六〇世となっている。南北朝期の終わり頃、惠僞はまさに鎌倉禅林を代表する臨濟禅者として重きをなしており、惠僞が新出「足利尊氏肖



伯英惠僞筆「南溪宗建道号偈」一幅 個人蔵

像画」の原本に讃語を揮毫したのは、まさにその建長寺の住持期に当たっている。

惠儒の讃語に「逢春閣」とあるのは、北朝の貞治三年（二二六四）に夢窓派の青山慈永（仏観禅師、一三〇二—一三六九）が建長寺方丈の右上（右後方）に建立した二階建て楼閣客殿のことであり、この逢春閣は応永二年（一四一四）には火災で焼失している。惠儒は建長寺住持として逢春閣で新出「足利尊氏肖像画」の原本に讃語を揮毫したのであり、僅か半世紀という限られた期間しか存在しなかった逢春閣の名称が讃語中に記されている点で、新出「足利尊氏肖像画」の持つ内容的な価値はきわめて高まるわけである。

その後、惠儒は鎌倉禅林から京都禅林へと活動の拠点を移しており、南北朝が合一される明德三年（一三九二）頃に京都嵯峨野の霊龜山天龍寺（京都五山第一位）の第二六世となり、応永二年（一三九五）の冬には瑞龍山南禅寺（五山之上）に昇住して第五三世に就任している。

応永四年（一三九七）に惠儒は南禅寺の住職を退いており、寺内に大寧院を構えて東堂として閑居している。田山方南編『禅林墨蹟拾遺（日本篇）』（思文閣出版刊）には、前南禅の肩書で伯英叟惠儒が応永九年（一四〇二）八月上澣に揮毫した「東山建侍者雅称南溪、拙偈賦之」と題する道号偈一幅が収められている。これは京都の東山建仁寺で侍者を務めていた法燈派の南溪宗建に付与した偈頌であり、宗建は無本覚心—孤峰覚明—聖徒明麟—子晋明魏—南溪宗建と嗣承しており、この道号偈は惠儒が記した貴重な墨蹟として現存している。この墨蹟を新出「足利尊氏肖像画」の讃語と比較すると、両史料で書体が明らかに相違しており、新出「足利尊氏肖像画」の讃語が惠儒直筆でないことが確かめられる。

応永一〇年（一四〇三）八月一二日に惠儒は「生死涅槃、全不相干、須彌踳跳、虚空展顔」という遺偈を残して遷化しており、南禅寺の大寧院に墓塔が立石された。鎌倉建長寺でも西外門に惠儒の塔頭（廟所）として華藏院が建てられている。偈頌に長じた惠儒には『伯英儒禅師疏』一篇が伝えられているが、残念ながら備前西祖寺に関するような疏文は見られない。

讚を依頼した月洲和尚

建長寺住持であった時期の伯英惠儒に対して「足利尊氏肖像画」の原本に讚を依頼したのは備陽西祖寺の住持を勤めていた月洲和尚という禅僧であった。月洲は足利尊氏の肖像画を絵師に描かせ、これを持参して自ら鎌倉へと赴き、建長寺の惠儒の

もとを訪ねたものであろう。惠僞の讃語の末尾には「備陽西祖寺月洲和尚、絵長壽寺殿尊真、請讚於老拙。永留本寺、以作供養」と記されている。これによれば、西祖寺の月洲が長壽寺殿すなわち足利尊氏の姿（尊真）を絵に描き、讚を惠僞に請うたことが知られる。絵を描いたのはもちろん絵師か画僧であるが、讚を直接に依頼したのが月洲であったことになる。西祖寺はかつて備前福岡庄すなわち現在の岡山市東区西祖に存した臨濟宗五山派の寺院であるが、すでに廃絶して久しく、山号も詳らかでない上に寺の変遷も定かでない。そのため月洲が西祖寺の住職として新出「足利尊氏肖像画」の原本を持参して遠く鎌倉建長寺に持参し、住持の惠僞に讚を依頼した経緯も定かでない。月洲その人についても、如何なる禅僧であったのか、ほとんど事跡が辿れないのが惜しまれる。

備前西祖寺と開山の頂山金居

限られた史料から、西祖寺のことを調べた結果、この寺を開いたのは大覚派の頂山金居という禅僧であったことが判明した。金居は蘭溪道隆の門下のひとり葦航道然（大興禪師、一二九一—一三〇二）の法を嗣いだ高弟であり、西祖寺のほか同じ備前沢田（岡山市中区沢田）に存した操山明禪寺（すでに廃寺）も金居によって創建されたものと見られる。北朝の貞和三年（一三四七）六月に西祖寺の金居から寄贈された梵鐘（鳥取県指定保護文化財）が鳥取県東伯郡琴浦町竹内の船上山智積寺（天台宗）に現存している。鳥取県立公文書館・県史編さん室編『新鳥取県史（資料編・古代中世2古記録編）』『金工品』には「智積寺鐘銘（琴浦町）」として「（一）区 備前福岡庄（二）区 貞和三禩歲次丁亥六月十三日誌之。西祖禪寺住持金居（一五三頁上段）と載せられている。なぜ備前西祖寺の金居が伯耆（鳥取県）智積寺の梵鐘に年時を刻んで寄贈しているのか定かでないが、貞和三年六月の当時、金居が西祖寺の住持として活躍していたさまが如実に窺われる。

金居は同じ大覚派の寂室元光（円応禪師、一二九〇—一三六七）とも親しい交友が存しており、『永源寂室和尚語録』巻下「小仏事」の「頂山和尚拈香」によれば、

頂山和尚拈香。

此香、實際地栽培、大覚海中浸爛。雖然無銖両、価直踰娑婆。触之則燎、却闍梨鉄面門、嗅著則塞、断衲僧閑鼻孔。直得、尺虚空遍法界森羅万象、四聖六凡情与無情、以至従上仏祖出世度生唱般涅槃、靡有不稟渠資薰之力。今日伏

值_二頂山和尚小祥之辰_一、代_二他入室真子感鼎諸兄_一、信_二手拈来_一、一_二蕪却_一、聊_二伸_一真法供養。是_二為報恩謝徳_一、抑_二亦復讐雪屈乎_一。
不見_二道_一、出_二乎已_一者、返_二於已_一也。（大正蔵八・二一七b c）

と記されている。これは頂山金居の小祥忌（一周忌）に当たつて寂室元光がなした拈香法語であり、「大覚海中」の大覚とは法統の祖である蘭溪道隆を指している。元光は直接に西祖寺に赴き、金居の入室伝法の門人感鼎らに代わつて小祥忌の拈香法語を述べていることになろう。拈香の文中に年月日や金居の年齢などが記されていないのが惜しまれる。

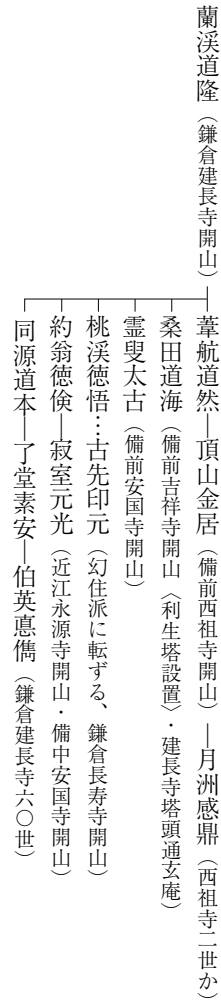
ちなみに『永源寂室和尚語録』巻上「仏祖贊」には「頂山和尚」と題した祖贊（大正蔵八・二一四c）が存し、巻下「小仏事」には「頂山和尚拈香」の法語のほかにも「西祖頂山和尚」と題した秉炬仏事の法語（同・一一九c）と「頂山和尚入塔」と題した入塔納骨の法語（同・二〇b c）も載せられている。元光が如何に西祖寺の頂山金居と親しい道交をなしていたか、金居の葬儀や納骨および年忌法要などに深く関わっていた事実が窺い知られる。

では、この頂山金居の小祥忌に際し、寂室元光に拈香法語を依頼した感鼎とは果たして如何なる禪者であつたのか。「頂山和尚拈香」では「他の入室の真子感鼎ら諸兄に代わり、手に信せて拈じ来たる」とあるから、感鼎は明確に金居の法を嗣いだ高弟であつたことが知られ、同門の禪者らとともに元光に拈香を願つたことが窺われる。さらに推測を逞しくするならば、感鼎は金居の師席を継いで西祖寺の第二代住持に就任した禪者であつたものと見られる。金居の高弟で西祖寺二代を継いだ感鼎が仮に新出「足利尊氏肖像画」に讃を依頼した西祖寺の月洲その人であつたとすれば、彼は月洲感鼎と称していたことになろう。少なくとも西祖寺開山の頂山金居の門人で大覚派の寂室元光と関わつた感鼎と、西祖寺住持として新出「足利尊氏肖像画」を大覚派の伯英惠備のもとに持参した月洲は、系統的にかなり近い関係にあつたことは疑いなかろう。

備前の禪寺と大覚派

西祖寺や明禪寺のみでなく、備前（岡山市東区鉄）の安国寺（すでに廢寺）も大覚派の靈叟太古が開山となつており、利生塔が安置された備前（赤磐市熊山町）の吉祥寺（すでに廢寺）も大覚派の桑田道海（智覚禪師、？—一三〇九）が開山とされている。ちなみに足利尊氏の塔所である鎌倉長寿寺の開山に迎えられた幻住派の古先印元（正宗広智禪師、一二九五—一三七四）も幼くして大覚派の桃溪徳悟（宏覚禪師、一二四〇—一三〇六）に就いて得度出家した因縁が存している。

これらの関係を大覚派の法脈で整理したかたちで示すと、左記の系図のようになる。



備前ゆかりの禅宗の寺々がいずれも鎌倉建長寺の蘭溪道隆の門流、大覚派に属する禅僧らと大きく関わっていた事実が判明する。ただ、なぜ備前西祖寺の月洲が足利尊氏の肖像画を描かせる必要があったのか、長寿寺殿ないし鎌倉長寿寺と西祖寺との関わりについては定かでない。少なくとも新出「足利尊氏肖像画」の画讃は京都の夢窓派を意識した等持院殿ではなく、鎌倉の大覚派を意識した長寿寺殿を前面に出すかたちで惠儁が讃語を付している点は特筆されてよいだろう。

年号と干支の問題

新出「足利尊氏肖像画」は原本ではなく複製本と見られているが、果たして原本はいつ作られたものなのであろうか。惠儁の画讃には「康応丁卯之秋」という年記の記載が存している。康応年間（一三八九—一三九〇）は南北朝が合一する直前の北朝年号であり、嘉慶三年（一三八九）己巳二月九日に康応と改元されてより、僅か一年後の康応二年（一三九〇）庚午三月二六日には明徳と改元されている。

問題なのは康応年間に「丁卯」の歳が存しないことであり、丁卯の歳であれば、嘉慶元年（一三八七）がこれに当たっている。丁卯の歳は至徳四年八月二三日に嘉慶と改元されているから、この年の秋に揮毫されたものということになるか。至徳四年ないし嘉慶元年の秋であれば、尊氏が没して三十回忌に肖像画が作製され、惠儁が肖像画讃を揮毫したことになる。しかも尊

氏が北朝の光明天皇から征夷大将軍に任じられたのは建武五年（一三三八）秋八月一日のことであり、八月二十八日に北朝は暦応元年と改元している。建武五年ないし暦応元年から数えると、ちょうど五〇年目が嘉慶元年丁卯の年に当たっている。

一方、康応年間の秋に惠備が新出「足利尊氏肖像画」の原本に讃語を揮毫したのであれば、康応元年（一三八九）の秋しか該当する年がなく、翌年に尊氏の三十三回忌を目前にその肖像画が作製され、惠備が讃語を付したことになる。おそらく新出「足利尊氏肖像画」の原本の讀には単に「丁卯之秋」とのみ記されていたものを、複写頂相を製作する段階で、至徳や嘉慶の年号を用いず、康応の年号を遡らせて補筆したものと解するのが妥当であろうか。

新出「足利尊氏肖像画」の讃語から伺えること

最後に複製本ながら新出「足利尊氏肖像画」に付された惠備の讃語の内容から伺えることをまとめておきたい。惠備の詠じた讃語では、足利尊氏の功績が大きく讃えられており、南北朝前期に尊氏がなした諸政策を是とし、とくに安国寺と利生塔を設置した意義が述べられている。原本の「足利尊氏肖像画」に惠備が讃を付したのは、三代將軍の足利義満（鹿苑院天山道義、一三五八—一四〇八）の治世であり、南北朝の合一をまさに目前にした時期に当たっている。

この時期に西祖寺の月洲は京都の等持院殿ではなく、鎌倉の長寿寺殿を高揚すべく、建長寺の伯英惠備に「足利尊氏肖像画」に讃語を依頼しているわけである。京都で夢窓派が大躍進する中、長寿寺殿を強調することで、これと対抗する意識が存したものであろうか。当時、大覚派を代表する伯英惠備が足利尊氏の肖像画に讃語を揮毫している背景には、特別な感慨が存したものとと思われる。

惠備が讃語を寄せた原本「足利尊氏肖像画」は西祖寺の寺内に大切に奉安され、しばらくの間は足利尊氏の命日（四月三〇日）などに報恩供養の儀式が行なわれたことであろう。それがなぜ僅か半世紀後に新たに複製が作られることになったのかは定かでない。おそらく兵乱や火災など何らかの事情で西祖寺所蔵の原本「足利尊氏肖像画」がかなり破損したため、足利尊氏に対する供養を永く継続すべく西祖寺で新たに複製を制作することが発願されたものではなからうか。だとすれば、新調した複製本である新出「足利尊氏肖像画」に伯英惠備の肖像画讃の文字を書き写したのは、当時、西祖寺の住持を務めていた頂山金居の系統に連なる大覚派の禪者であったと解するのが自然であろう。

〔新出〕足利尊氏肖像画讚〔資料・訓註編〕

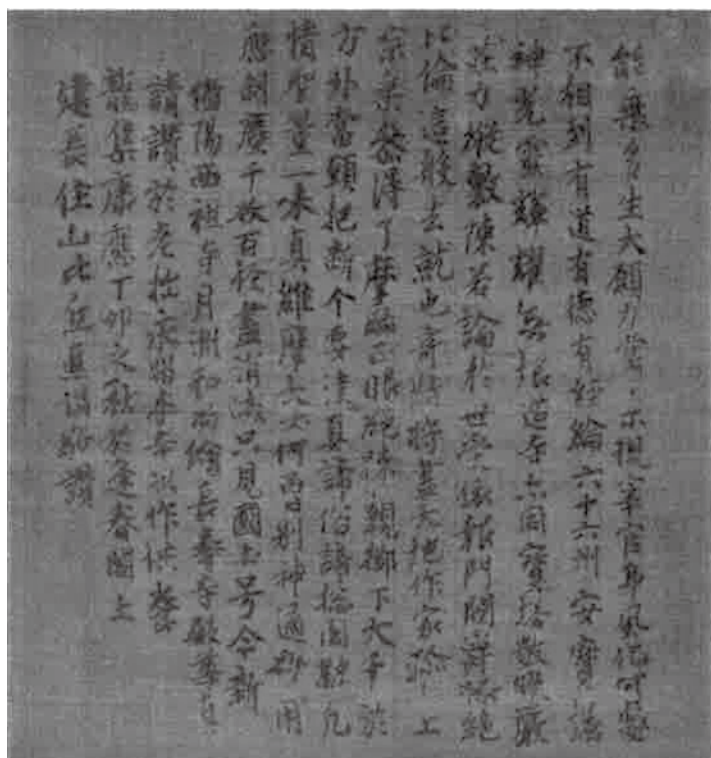
【原文のまま翻刻】

能乘多生大願力堂々示現宰官身風化何處
不相到有道有德有經綸六十六州安寶塔
神光靈輝耀無垠造寺亦同寶塔數妙嚴
莊力縱敷陳若論於世受依報門閤爵祿絕
比倫這般去就也奇特將盡大地作家珍從上
宗乘參得了摩醯正眼絕疎親擲下大千於
方外當頭把斷个要津真諦俗諦摠圓融凡
情聖量一味真維摩大士何曾別神通妙用
應利塵千妖百怪盡消滅只見國土号令新
備陽西祖寺月洲和尚繪長壽寺殿尊真
請讚於老拙永留本寺以作供養
龍集康應丁卯之秋於逢春閣上
建長住山比丘惠僞敬讚〔朱方印〕〔朱方印〕

【句読点を付して翻刻】

能乘多生大願力、堂々示現宰官身。
風化何處不相到。有道有德有經綸。
六十六州安寶塔、神光靈輝耀無垠。
造寺亦同寶塔數、妙嚴莊力縱敷陳。

足利尊氏肖像画と伯英惠僞（佐藤）



伯英惠僞の讚語

若論於世受依報、門閥爵祿絶比倫。
這般去就也奇特、将盡大地作家珍。
從上宗乘參得了、摩醯正眼絶疎親。
擲下大千於方外、當頭把断个要津。
真諦俗諦摠圓融、凡情聖量一味真。
維摩大士何曾別、神通妙用應刹塵。
千妖百怪盡消滅、只見國土号令新。

備陽西祖寺月洲和尚、繪長壽寺殿尊真、請讚於老拙。永留本寺、以作供養。
龍集康應丁卯之秋、於逢春閣上、建長住山比丘惠備、敬讚。「朱方印」「朱方印」

【書さ下し文】

能く多生の大願力に乗じ、堂々として宰官身を示現す。
風化、何れの処か相い到らざる。道有り、徳有り、経綸有り。
六十六州に宝塔を安じ、神光靈輝、耀くこと垠り無し。
寺を造ること亦た宝塔の数に同じく、妙嚴莊力もて縦いままに敷陳す。
若し世に於いて依報を受くることを論ぜば、門閥・爵祿とも比倫を絶す。
這般の去就も也た奇特なり、尽大地を将て家珍と作す。
從上の宗乘は參得し了わり、摩醯の正眼により疎親を絶す。
大千を方外に擲下し、當頭に个の要津を把断す。
真諦・俗諦は摠べて円融し、凡情・聖量は一味にして真なり。
維摩大士、何ぞ曾て別ならん。神通妙用もて刹塵に応ず。
千妖百怪は尽く消滅し、只だ国土に号令の新たなるを見る。

備陽西祖寺の月洲和尚、長寿寺殿の尊真を絵き、讚を老拙に請う。永く本寺に留め、以て供養を作したまえ。
龍集康応丁卯の秋、逢春閣上に於いて、建長住山比丘惠備、敬んで讚す。「朱方印」「朱方印」

【現代語訳】

このお方は何度も生まれ変わる大きな願力により、堂々とした為政者の御姿を現わされた。その徳風で感化の到らないところが何処にあったらう。道を具え徳を具え天下を治めるすべも具えておられたのだ。日本国内六十六州の各地に利生宝塔を安置され、測り知れないその神変の光は輝きつづけて果てがない。安国寺を造立することもまた利生宝塔の教と同じであつて、その莊嚴な力を盛んにし、ほしいままに敷き施された。もし世の中で国土を受けることを論じたならば、家柄といい爵位や禄高といい、比べるものを超えておられた。このような行ないすべてが何とすぐれたものであつたことか。国のすべての土地を大切な家宝と考えておられた。仏法の最も奥深い教えも参学し切つており、大自在天のような卓越した見識で、自身に疎遠か親近かを越えてものごとを公平に捉えておられた。この世の中すべてを仏法の世界へと放り投げ、即座にその要所を捉えておられた。仏法の真理も世俗の道理もすべて妨げることなく行きわたらせ、凡夫の心情も聖者の思量も同一に真なるものとされてきた。世俗の菩薩と称えられた維摩居士とどうして別であるうや。他の人々の遠く及ばないすぐれたはたらきによって、多くの事柄に対応されたのである。そのため無数の物の怪はすべて消え失せ、ただ国中に号令が新たに敷かれたのを見るのみである。

備陽の西祖寺の月洲和尚が長寿寺殿の尊い御姿を描いて、讚の文章をこの年老いた私に願つて来られた。この肖像画を末永く御寺に留められ、供養をなしていただきたい。

その年は康応丁卯の秋のこと、逢春閣の上で、建長寺の住持である比丘の惠備が敬んで讚を記した。

【語註】

多生：多くの生を受ける。何度も生を変えてこの世に生まれ出る。幾度も生まれ変わつて多くの生を受ける。罪障が深く幾度も生死を繰り返

す身をいう。幾度も生まれ変わる間。『南石和尚語録』卷三「偈頌上」の「寄中竺幻居禪師」に「千歳巖前大開士、手面縦横妙無比。娑

婆擲去猶針鋒、妙喜撮來如粟米。多生願力深且堅、要度迷流出生死」（『正統藏一〇四a』）とある。

大願力：大きな願いの力。広大な衆生済度の誓願の力。仏菩薩が甚大な慈悲で衆生を救済しようとする誓願。『大般若波羅蜜多經』第五五九「第五分地獄品第八」に「是諸菩薩已多親近諸佛世尊、曾問此中甚深法義已、經無量無數大劫、修集百千行苦行、乘大願力來生此土」（大正藏七・八八四a）とあり、『月江和尚語錄』卷中「朝廷金山寺建水陸會普說」に「所以乘大願力、示現世間、為三界大師四生慈父、如優曇華時一現爾」（『正統藏一〇三・一三八a』）とある。

堂堂：堂々として。堂々たり。ありさまが厳しく立派なさま。容貌の立派なさま。人々に抜きん出ている様子をいう。『宗門聯燈會要』卷二八「台州瑞巖子鴻禪師」の章に「法爾不爾、建立乖真。堂堂現成、雕琢成偽。妙円超悟、頭上安頭。頓獲法身、柳上著杻」（『正統藏一三六・四五八c-d』）とある。

示現：示し現わす。姿を見せる。仏菩薩などが衆生を教化救済するため種々の姿をこの世の中に示し現わす。すぐれた人物がこの世に出現する意にも用いる。『大慧禪師禪宗雜毒海』卷下の「李運使画像贊」に「等閑示現宰官身、便作儒林出格人。野服幅巾帰旧隱、游戲寰中物外春」（『正統藏一一・四八c』）とある。

宰官身：宰官の身。宰官は支配者・命令者。権限をもって政治を執り行う者。人民を主宰する官公職の者をいう。宰は主どる。官は功能。『妙法蓮華經』「觀世音菩薩普門品第二十五」に「応以居士身得度者、即現居士身而為說法。応以宰官身得度者、即現宰官身而為說法」（大正藏九・五七b）とあり、『月江和尚語錄』卷下「仏祖讚」の「子

昂趙學士筆」に「大士示現宰官身、宴坐玉堂而說法、一朝奉詔登宝陀、親觀如是慈悲相」（『正統藏一〇三・一〇四d』）とある。

風化：民俗教化の略。徳風で感化する。徳ある者が人格的に他の人々を感化する。『景德伝燈録』卷二三「昇州清凉院文益禪師」の章に「師縁被於金陵、三坐大道場、朝夕演旨。時諸方叢林咸遵風化。異域有慕其法者、涉遠而至」（大正藏五一・三九九c）とある。

有道有徳：道有り徳有り。道を学んで徳を身に付ける。有道は道を修める、仏道を実践する意に用いる。有徳は道を学んで徳を身につける。道を修めたことよって実現される徳望も具えている。『虚堂和尚語録』卷八「虚堂和尚統轄」の「上堂」に「鐘鼓之鳴、可以節礼楽。權衡之正、可以定錙銖。而我比丘為仏弟子、有道有徳、有仁有義」（大正藏四七・一〇四三b）とある。

経綸：経は機の縦糸。綸は糸を整え納める。機を織るには最初に縦糸を引き、それに横糸を織り込んでいく。経綸とは天下を治めるのに、国を治め天下を平らかにする。混沌とした世の中を治めるのに、まず規模を定め、つぎに事業に及ぶ。『易経』「屯」に「大象、雲雷屯、君子以経綸」とある。『石門文字禪』卷二「古詩」の「仇彦和佐邑崇仁、有白蓮及葩並幹芝草叢生於泉齋之、旁作堂名曰瑞応。且求詩、敬為賦之」に「宰肉杜樹陰、豈無天下志。用材樸楔間、已有経綸意」（『禪門逸書初編四・一八a』）とある。

六十六州安宝塔：六十六州に宝塔を安ず。日本国中に宝塔を安置（奉安）する。仏光派（夢窓派祖）の夢窓疎石の勧めで足利尊氏・足利直義の兄弟が北朝の康永四年（南朝の興国六年、一三四五）に光厳天皇の院宣により、かつての国分寺に做つて諸国に設置した安国寺に付属して

利生塔を安置したことをいう。利生塔とは戦没者などの霊を弔うために建てる塔。詳しくは今枝愛真『中世禅宗史の研究』(一九七〇年八月、東京大学出版会)の「安国寺・利生塔の設立」の「利生塔の設置」の箇所(八三頁〜一〇七頁)および松尾剛次『日本中世の禅と律』(二〇〇三年一月、吉川弘文館)の「安国寺・利生塔再考」の箇所(二八四頁〜二九五頁)を参照。『夢窓国師語録』卷下「陞座」の「康永改元壬午仲秋初五日欽奉『聖旨』慶讃京城東山八坂宝塔」に「阿育王曾造八万四千塔廟、皆折八祥之靈地、以為『祉基』。博桑国新立『六十六箇之浮図』、先『於八坂之精藍』、而修『供養』」(大正蔵八〇・四六七b)とある。

六十六州：往古の日本国内の地方行政区分。日本全体を総称する際に用いられた。律令制のときの令制国に始まり、日本六十余州と称される。実際には畿内・七道の六十六州に壹岐と対馬の二島を併せた六十八州であるが、一般に六十六州と称されることが多かった。畿内は山城・大和・河内・和泉・摂津の五ヶ国であり、これを五畿内と称する。七道とは東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道の七つの道である。東海道は伊賀・伊勢・志摩・尾張・三河・遠江・駿河・伊豆・甲斐・相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸の一五ヶ国であり、東山道は近江・美濃・飛騨・信濃・上野・下野・陸奥・出羽の八ヶ国であり、北陸道は若狭・越前・越中・越後・能登・加賀・佐渡の七ヶ国であり、山陰道は丹波・丹後・但馬・因幡・伯耆・出雲・石見・隠岐の八ヶ国であり、山陽道は播磨・美作・備前・備中・備後・安芸・周防・長門の八ヶ国であり、南海道は紀伊・淡路・伊予・讃岐・阿波・土佐の六ヶ国であり、西海道は筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・

肥後・日向・大隅・薩摩の九ヶ国に壹岐・対馬の二島を加えた一一ヶ国であつて、畿内・七道を合わせると六十八州となる。東北地方は陸奥と出羽のみに大きく分けられ、北海道は蝦夷地として組み込まれていない。

宝塔：宝玉で造られた仏塔。二層の多宝塔に対して、円形の塔身がある単層の塔形。『普菴録』卷二「題宝塔」に「塔本無縫、真如不動。說此經、処、涌出虚空。釈迦多宝、聽說如夢。(中略)護持礼塔、摧滅魔蹤。顯正宝塔、八面玲瓏」(『正統蔵』二〇・三〇二a)とある。ここでは足利尊氏・直義の兄弟が夢窓疎石の勧めを受けて元弘の変より以降の戦没者の霊を弔い、天下泰平を祈願して全国に建立した利生塔を指す。北朝の暦応元年(一三三八)から貞和年間(一三四五―一三五〇)にかけて全国六十八州にそれぞれ一塔が設けられ、各塔には朝廷から仏舍利二粒が収められたとされ、光厳上皇の院宣で「利生」の称号が与えられた。天台・真言・律などの旧仏教系のほか、山城・相模・駿河などでは五山禅院、能登では曹洞宗の瑩山紹瑾(一二六四―一三二五)が創建した洞谷山永光寺に設置されており、その多くは五重塔または三重塔であつた。備前の利生塔は岡山県赤磐市熊山町に存した吉祥寺(臨濟宗)の境内に建てられたとされ「藤原軒日録」寛正二年八月四日」の条に「備前国吉祥寺塔婆料奉行之事、可被仰付」とある。また「心田播禪師疏」(「山門」には「鞏首座住備之后州(前州カ)吉祥山門(正伝菴門徒、開山塔曰利生)」(五山新集別一・七一八頁)と題する山門疏が載せられている。吉祥寺の開山は大覚派の桑田道海(智覚禪師、?―一三〇九)であるが、この寺も廃寺となつてすでに久しい。

神光靈輝耀無垠：神光靈輝、耀きて垠り無し。神光は神妙な光明、諸仏が肉身から發する光明。測り知れない神変をいう。『密菴和尚語録』法語の「示白雲然長老」に「神光不味、万古微猷、只此靈鋒、阿誰敢擬」（大正藏四七・九八〇a）とある。靈輝は靈光に同じ、不思議な光。不可思議で量り知れない輝き。衆生が本来具有している仏性の輝きに譬えられる。『景德伝燈録』卷九「福州古靈神讚禪師」の章に「靈光独耀、迥脱根塵。体露真常、不拘文字。心性無染、本自円成」（大正藏五一・二六八a）とある。耀は輝き照らす、一きわ光を加える。垠は限り、果て極み。無垠で境界・限界がない。『円悟仏果禪師語録』卷一「住成都府崇寧万寿禪寺語録」の「陞座」に「如今坐立儼然、見聞不味、光輝溢目、寂爾無垠」（大正藏四七七・一五a）とある。造寺：寺を造る。寺院の建物を造る。造寺造塔で寺院や堂塔を建立する。『景德伝燈録』卷三「第二十八祖菩提達磨」の章に達磨と梁の武帝の間答として「帝問曰、朕即位已来、造寺写经度僧、不可勝纪、有何功德。師曰、並無功德。帝曰、何以無功德。師曰、此但人天小果有漏之因、如影随形、雖有非実」（大正藏五一・二二九a）とある。ここでは足利尊氏と弟の足利直義が仏光派（夢窓派祖）の夢窓疎石の勧めで利生塔と同時期に六十六州二島に制定した安国寺を指す。將軍の御教書により各国守護の菩提所であった五山派有力寺院が安国寺に指定された。今枝愛眞『中世禅宗史の研究』の「安国寺・利生塔の設立」の「安国寺の設定」の箇所（一〇八頁～一二八頁）および松尾剛次『日本中世の禅と律』の「安国寺・利生塔再考」の箇所（一八四頁～二一五頁）を参照。備前の安国寺には岡山市西大寺町鉄地蔵院に存する青雲山安国寺が制定されており、開山は大覚派の靈叟太古であり、

開基は南北朝期の葉師寺公義（次郎左衛門、法名は元可）であったが、現在は真言宗寺院となっている。

妙嚴莊力：最初の字は判読し難いが、おそらく「妙」と解してよいだろう。妙嚴莊は妙莊嚴と同じく、きわめて莊嚴なこと。『宏智禪師広録』卷九「明州天童寛和尚真贊」の自序に「真精進而離妄、法供養以無疵、妙莊嚴以從縁、慧方便而不縛。毘盧性空而智身了了、普賢毛孔而法界重重」（大正藏四八・一〇一a）とあり、『普菴録』卷二「頌石頭和尚草菴歌」に「問此菴、有誰直下肯承当。不假良材并巧匠、重重帝網妙嚴莊」（正統藏二〇・三三三c）とある。

敷陳：広く敷き述べる。明らかに述べる。教えや威光などを人々に説き示す。『補続高僧伝』卷一四「夢堂璽公伝」に「師佐三元叟、敷陳法要。及与群公辯論、義趣英發、莫不推敬」（正統藏一三四・一二五c）とある。

依報：拠り所となっているもの。住する場所。国土世間。環境世界。過去の業によつて受けた我が身を正報というのに対し、その拠り所となる一切世間の事物・国土など対象世界を依報という。『景德伝燈録』卷五「温州永嘉玄覺禪師」の章に「依報与空相応、則施与劫奪何得何失。（中略）依報与空不空相応、則永絶貪求資財給濟。（中略）依報与空不空非空非不空相応、則香臺宝閣嚴土化生」（大正藏五一・二四二a）とある。

門閥：家柄・家格。家の格式。門地。閥は門柱に掲げて家格を示す札をいう。『禅林僧宝伝』卷二九「雲居仏印元禪師」の伝に「衆姓出家、同名釈子。自非買崔盧以門閥相高、安問貴種」（正統藏一三七・二八〇c）とある。

爵祿：位と祿。爵位と俸祿。身分地位と祿高。官位と財力。『中庸』「右第八章」に「子曰、天下国家可均也、爵祿可辭也、白刃可蹈也。中庸不可能也」とあり、『叢林盛事』巻下「安定郡王号超然居士」の項に「世人無始時来、有大苦惱、惑乱身心、不求出離。(中略)自古迄今、老幼貴賤無不被其害也。蓋世人広貪財利、追求爵祿」(『正統蔵一四八・四三d』)とある。

絶比倫：比倫を絶する。比べるものを遙かに超えている。人並みよりきわめて勝れている。『建中靖国統燈録』巻三〇「偈頌門」の「明州雪竇山重顕明覚禪師」の章の「讚仏」に「螺髮右旋仙島碧、眉月斜印海門新。鸞翔鳳舞非殊品、象輶龍蟠絶比倫」(『正統蔵一三六・二〇〇d』)とある。

這般去就：這般の去就。這般は者般・遮般とも。この類いの。このような。去就は去つたり就いたり。出処進退。もののけじめの判断。地位から去ると地位に就くと。『大慧普覺禪師語録』巻九「雲居首座寮秉扨」に「我王庫内無如是刀。若是出格道流、必不作這般去就。雖然如是、尽法無民。今夜放一線道、与諸人相見」(『大正蔵四七・八四六b』)とある。

奇特：奇妙特別の略。とりわけて珍しくすぐれている。常識的な思考を超えている。不可思議で深遠微妙である。『宗門聯燈会要』巻四「洪州百丈懷海禪師」の章に「僧問、如何是奇特事。師云、独坐大雄峯。僧作礼。師便打」(『正統蔵一三六・二四九c』)とあり、『宗門聯燈会要』巻一三「舒州浮山法遠禪師」の章に「不見古人云、会得也奇特、不会亦相許」(『正統蔵一三六・三二一a』)とある。「也奇特」とは「也た奇特なり」で、何と奇特なことか、また素晴らしいことである。

足利尊氏肖像画と伯英惠備(佐藤)

尽大地：大地を尽くす。大地のすべて。この地上のすべて。世界中どこなどころにも。『宗門聯燈会要』巻二七「筠州洞山曉聰禪師」の章に「所以忘勞、尽大地作箇胡餅、天下人尽得喫、唯有深沙神不得喫」(『正統蔵一三六・四四七b』)とある。

家珍：家の宝。自家の珍宝。真に価値のあるもの。人々本具の仏性に譬える。『景德伝燈録』巻一六「撫州黃山月輪禪師」の章に「所以道、從門入者不是家珍。認影為頭、豈非大錯」(『大正蔵五一・三三三c』)とある。ただし、本画賛では門の内外すら立てず、尽大地をもつて家珍となす足利尊氏の広大な理想が語られている。

從上宗乘：原文では最初の文字が摩滅して読みにくいのが、「從上宗乘」か「向上宗乘」のいずれかであろう。「從上宗乘」であるならば、代々伝えられてきた禪の教えの意。從上は上から、これまでの、昔からの。宗乘は禪宗の教え、禪の宗旨。乘は大乗・小乗のごとく教えを乗り物に譬えた表現。『宗門聯燈会要』巻七「筠州黃檗希運禪師」の章に「師問百丈、從上宗乘、如何指示於人。丈拋坐。師云、後代兒孫、將何伝授。丈云、我将謂爾是箇人。便起去」(『正統蔵一三六・二七四a』)とある。「向上宗乘」であるならば、最上の教え、さらに上の教え。仏法の最も奥深い宗義。禪の第一義の教え。『景德伝燈録』巻二二「隨州双泉山師覺明教大師」の章に「問、向上宗乘、如何拈唱。師曰、不敢。曰、恁麼即含生有望。師曰、脚下水深淺」(『大正蔵五一・三八六c』)とある。

參得：參じ尽くす。參じて体得する。師に參じて悟りを得る。『法演禪師語録』巻上「次住海会語録」の「上堂」に「幸然可憐生、剛地学參。問既然參得了。未免肚裏悶。悶即自家悶、困即自家困」(『大正蔵

四七・六五五a）とある。「参得了」で、参じ尽くした、参じ切ったの意。

摩醯正眼：摩醯は摩醯首羅。Mahesvara マケイシユバラ。大自在天。宇宙の大主宰神とされるシバ神をいう。三目八臂で白象に乗る。大自在天には三目（三つの目）があるとされる。正眼は正しい眼。卓越した見識。正しい般若の智慧。「大慧普覚禪師語録」卷一三「大慧普覚禪師普説」の「定光大師請普説」に「一刀截断生死路、摩醯正眼頂門開、無辺業障俱銷殞。畢竟如何。寒山拾得在天台」（大正蔵四七・八六六c）とある。

絶疎親：疎親を絶する。疎親は親疎と同じ、縁遠いと親密。疎遠なものと親近なこと。疎親を絶すで、足利尊氏が自身の縁者の利益のためだけにでなく、広く武家全体のために正しい見識で尽力したことを意味しよう。『汾陽無徳禪師語録』卷下「仏道訣」に「仏道顯然、顯然不是。不是不辨、万象俱現。日月空明、物我皆水。氷鏡弗真、杳絶疎親」（大正蔵四七・六二二c）とある。

擲下：抛下や放下とも。放り投げる。投げ捨てる。手放す。『景德伝燈録』卷一五「潭州神山僧密禪師」の章に「一日与洞山鋤茶園。洞山擲下鏝頭曰、我今日困、一点気力也無」（大正蔵五一・三三三c）とある。「大千を方外に擲下す」とは、没量の大人の量り知れない働きをいう。大千：三千大千世界・三千大千国土。三千世界。千の三乗の数の世界。ありとあらゆる世界。全世界・全宇宙。『法演禪師語録』卷中「舒州白雲山海会演和尚語録」の「提刑入寺上堂」に「納須彌於芥中、擲大千於方外、變大地為黄金、攪長河為酥酪」（大正蔵四七・六五八a）とある。

方外：世の外。世俗社会を超えた立場。仏門・出家の立場。出世間のありよう。『大慧普覚禪師語録』卷一五「大慧普覚禪師普説」の「劉侍郎親書華嚴經施師、仍請普説」に「僧問、擲大千於方外、納須彌於芥中、是甚麼人分上事。師云、是没量大人分上事」（大正蔵四七・八七七a）とある。

当頭：その場で。即座に。忽ちに。目の前で。『応菴和尚語録』卷五「建康府蒋山太平興国禪寺語録」の入寺法語に「金剛正体、融摂十虚、透頂透底絶羅籠、亘古亘今無向背。不是心不是仏不是物、当頭坐断、千眼頓開」（正統蔵二二〇・四一九d〜四二〇a）とある。

把断：把住・把定と同意。引つ捕まえる。押さえ込む。把断要津で急所を抑える意。『宗門聯燈会要』卷二三「澧州洛浦元安禪師」の章に「示衆云、末後一句、始到牢関、把断要津、不通凡聖」（正統蔵一三六・四〇五d）とある。

要津：重要な船着場。渡し場。肝要な場所。急所。仏法を修行する上での関門、向上一路の機関をいう。『宗門聯燈会要』卷一八「温州浄居妙道禪師」の章に「有時孤峯頂上把断要津、恁麼也不得、不恁麼也不得。有時鬧市門頭放開一練、恁麼也得、不恁麼也得」（正統蔵一三六・三六三d）とある。

真諦俗諦：仏法と世法。真諦は真理・真実。究極の真実。最上の真理。第一義諦。仏法のことを指す。俗諦は世諦・世俗諦ともいう。世間的な真理。世俗の立場での真理。世間一般が承認している真実。『癡絶和尚語録』卷上「法語」の「瑩悦二上人幹陳塘開覓語」に「如是則仏法世法、真諦俗諦、豈有兩途」（正統蔵二二・二六三c）とある。

円融：遍くゆきわたる。なだらかで滞りがない。互いに溶け合つて妨げ合わない。それぞれのものがその立場を保ちながら完全に一体となっているさま。『禪林僧宝伝』巻二五「法華拳禪師」の章に「又謁福嚴承禪師。承問、作麼生是円融之相。対曰、木人嶺上休相覷、石女谿辺更不迷」（『正統蔵一三七・二五二d』）とある。

凡情聖量：凡情と聖量。凡情は凡人の心情。凡夫のはからい。凡夫の情識分別。分別心。聖量は賢聖の思量、賢位や聖位に至つた人の思い。凡聖の情量と解すれば、凡夫と聖賢を情識（分別心）で推し量ろうとする。『嘉泰普燈録』巻二〇「通州狼山羅庵慧温禪師」の章に「釈迦老子、四十九年、坐籌幃幄。弥勒大士、九十一劫、帶水拖泥。凡情聖量、不能剷除、理照寛知、猶存露布」（『正統蔵一三七・二四二a』）とある。

一味真実：一味真実、一味真心の略。一味は海水のすべてが同一の塩味であるように、平等にして差別のないこと。『虚舟和尚語録』「平江府承天能仁禪寺語録」の入寺法語に「此香、枝葉全無、一味真実。観著則両目全枯、嗅著則打出鼻孔」（『正統蔵一三三・八四a』）とある。

維摩大士：維摩は「維摩詰所説経」（略して「維摩経」）の主人公である居士の維摩詰のこと。大士は開士とも。賢者。すぐれた人。菩薩のこと。あるいは在家の菩薩をいう。維摩 Vinaya びや、ヴィマラ・キールティは、音写が毘摩羅詰・維摩詰。漢訳は浄名・無垢称。『維摩詰所説経』の主人公で、釈迦の弟子たちの声聞（小乗）の立場をやり込める大乘の在俗居士として描かれている。『景德伝燈録』巻三〇「銘記箴歌」の「永嘉真覺大師証道歌」に「維摩大士頓除疑、還同赫日銷霜雪。不思議解脫力、此即成吾善知識」（『大正蔵五一・四六一a』）と

足利尊氏肖像画と伯英惠備（佐藤）

ある。

神通妙用：不思議な作用。神通は神通力・超能力。六神通など。一般人の能力を超えた不可思議で自在な威力。超人的なはたらき。妙用は絶妙の機用、すぐれたはたらき。用は作用、はたらき。『景德伝燈録』巻九「襄州居士龐蘊」の章に「日用事無別、唯吾自偶諧、頭頭非取捨、处处勿張乖。朱紫誰為号、丘山絶点埃。神通并妙用、運水及般柴」（『大正蔵五一・二六三b』）という偈頌が存する。

利塵：無数の国土を微塵としたほどの数が多いこと。無数の国土。無数の意。『慧林禪院第一代円照禪師別録二「偈頌」』の「郭氏裝観音像、求師為讚」に「宝陀巖上吉祥人、妙相真風応利塵、慈眼普観三界内、悲心広濟勿疎親」（『正統蔵二二六・二六二c』）とある。

千妖百怪：千百の妖怪。多くのものの怪。無数の化け物。画賛の原本が書かれたのは三代將軍足利義満の治世、南北朝末期のことであるから、南朝方や実弟の足利直義方を含めて足利尊氏に敵対した諸勢力を総称した言い方であろうか。『松源和尚語録』巻上「無為軍治父山實際禪院語録」の「端午上堂」に「今朝五月端午節、衲僧門下無一説。千妖百怪自潛蹤、万里長天一条鉄」（『正統蔵二二・二九〇b』）とある。消滅：消え失せる。とりわけ悪いことが消えてなくなる。『破菴和尚語録』「臨安府広寿慧雲禪寺語録」の「上堂」に「今朝五月端午節、千妖百怪尽消滅。艾虎桃符相耳語、揺頭不肯向人説」（『正統蔵二二・四一八d』）とある。

只見：只だ見るゝなるを。ただのみを見る。『嘉泰普燈録』巻二六「道場正堂辯禪師一則」に「利刀割肉瘡猶合、惡語傷人恨不消。只見国清才子貴、那知家富小兒驕」（『正統蔵一三七・一八八d』）とある。

国土：国。国の領土・領域。人々の居住する環境世界。器世間のこと。
 ここでは広くは全世界を指し、狭義には日本国をいう。また仏国土の意。『景德伝燈録』巻二五「天台山徳留国師」の章に「幸然未会、且莫探頭。探頭即不中。諸上座相共照明、令法久住、国土安樂」（大正蔵五一・四〇八b）とある。

号令：指図する。命令する。大声を出して命令する。『大光明蔵』卷下「汝州宝応禪師」の章に「宝雲曰、君子抱孫不抱子。（中略）赤肉团上、壁立千仞、便有超仏越祖之意。作家不啐啄。啐啄同时失、便有号令諸方之旨」（正統蔵一三七・四三九d）とあり、『仏鑑禪師語録』巻二「住臨安府徑山興聖万寿禪寺語録」の「掛鐘」に「声此洪鐘、一新号令、有四願言、宜加聳聽」（正統蔵二二・四四八c）とある。
 備陽：備前福岡庄、現在の岡山市東区と瀬戸内市長船町福岡にまたがる地域を指す。福山藩士の宮原直御（何有、八郎右衛門、一七〇二—一七七六）が記した福山市指定重要文化財『備陽六郡志』四四巻があり、「内篇」一四巻と「外篇」一五巻に神社・仏閣の記事が存する。
 西祖寺：かつて備前上道郡福岡庄すなわち現在の岡山市東区西祖に存した臨済宗の西祖禪寺のこと。江戸後期にはすでに廃寺となっていたものらしく、備前岡山藩で寛政年間（一七八九—一八〇一）に編纂された地誌『吉備温己秘録』巻三六「古蹟下」に「西祖寺。西祖村。慶長十年高物成帳迄には、西祖寺村とあり」として「西祖村にありし寺にて、いつ廃せしや不審。禪宗と見へたり。頂山和尚の開基なり。又寂室和尚も当寺に居たると見へたり」（『吉備群書集成』第七輯に所収、国会図書館・昭和六年）とある。『永源寂室和尚語録』巻末に付される『江州永源寺開山円応禪師行状』に「観応元年庚寅七月九日、有

長勝寺命、不辭焉。自大元還積二十五載、在備作際、專將韜晦而居焉。其地曰歌鳥。吉備安田稚村、其寺院乃西祖・明禪・安国・慈広菩提也。越明年辛卯、僑居撰州福嚴寺。又応道友招、住江州往生院」（大正蔵八一・一三四c）一三五a、統群類九下・五八八b）とあるから、大覚派の寂室元光（円応禪師、一二九〇—一三六七）も西祖寺に滞在したことで知られる。『永源寂室和尚語録』巻上「仏祖贊」に「頂山和尚」の祖贊（大正蔵八一・一一四c）が存し、同巻下「小仏事」にも「頂山和尚拈香」と題した一周忌の法語（同・一一七b、c）と「西祖頂山和尚」と題した乗炬仏事の法語（同・一一九c）と「頂山和尚入塔」と題した墓塔納骨の法語（同・一二〇b、c）が存するから、西祖寺の開山が道号を頂山と称していたことが知られ、頂山は元光と親しい交友をなしていたものらしく、元光は頂山の遷化および一周忌や納骨などに親しく西祖寺で仏事を執行している。一方、鳥取県東伯郡琴浦町竹内の智積寺（天台宗）には貞和三年（一三四七）六月の銘が刻まれた梵鐘が存し、西祖禪寺の住持金居から寄贈されたものであることが記されている。鳥取県立公文書館・県史編さん室編『新鳥取県史（資料編・古代中世2古記録編）』『金工品』には「智積寺鐘銘（琴浦町）」として「（二区）備前福岡庄（二区）貞和三禪歳次丁亥六月十三日誌之。西祖禪寺住持金居（一五三頁上段）と載せられている。これらに本史料の足利尊氏画像贊の内容を加えると、西祖寺の住持として頂山・金居・月洲の三禪者の存在が知られることになり、先の「頂山和尚拈香」には頂山の入室の弟子として西祖寺二世となったと見られる感鼎という禪者の名も記されている。さらに玉村竹二『五山禪林宗派図』（昭和六〇年二月、思文閣出版刊）によると、

大覚派の輩航道然（大興禪師、一一二九—一二〇一）の法嗣のひとつに「頂山□居」という禪者が載せられている。ここに「頂山和尚」「西祖禪寺住持金居」「頂山□居」を当て嵌めると、道号を頂山、法諱を金居と称していたことになり、この頂山金居こそ備前西祖寺の開山であった事実が判明する。しかも西祖寺の開山が頂山金居であったはか、備前の地の安国寺開山が靈叟太古であり、利生塔の存した吉祥寺開山が桑田道海（智覚禪師、？—一三〇九）であった。それに近江（滋賀県）永源寺の開山で備前安国寺の開山でもある寂室元光と、鎌倉建長寺の住持として本肖像画讃を揮毫した伯英惠備を含めて、いずれも大覚派祖の蘭溪道隆の門流大覚派に属していることがわかる。それら大覚派の禪者たちの関連系図を示すならば、本文中に載せた法系譜のごとくならう。

月洲和尚：大覚派の伯英惠備と同世代の備前西祖寺の住職であり、惠備に原本「足利尊氏肖像画」の讃語を依頼した禪者である。月洲は道号。法諱は未詳。伯英惠備が活躍していた十四世紀末頃に月洲の道号を持つ禪者としては、破庵祖先—無準師範—東福円爾—白雲慧晄—虚空希白—春山守元—月洲啓運と嗣承する破庵派（聖一派）の月洲啓運があり、松源崇嶽—無得覚通—虚舟普度—虎巖淨伏—即休契了—愚中周及—宗綱慧統—月洲祖心と嗣承する松源派（愚中派）の月洲祖心も存している。関連史料がほとんど残されていないことから、西祖寺の月洲が具体的に誰を指すのか確定し得ない。しかしながら、西祖寺が大覚派の頂山金居によって創建されていることから、月洲和尚も金居の法嗣か法孫であった可能性が高い。一に金居の入室の真子である感鼎という禪者が後席を継いで西祖寺第二世に住し、大覚派の寂室元光に金

足利尊氏肖像画と伯英惠備（佐藤）

居の小祥忌（一周忌）の小仏事を依頼しており、この感鼎が月洲和尚ではないかとも推測される。いずれにせよ、讃を依頼した月洲という禪者の詳しい事跡が全く迎れないのが惜しまれる。月洲は自ら足利尊氏肖像画を携帯所持して備前西祖寺から鎌倉建長寺へと赴き、建長寺現住であった惠備に讃語を依頼しているわけである。月洲と足利尊氏との関わりは何ら定かでないが、あるいは月洲は尊氏の実子か親近の縁者であった可能性も存しようか。

長寿寺殿：室町幕府初代將軍の足利尊氏（高氏、一三〇五—一三五八）の法号。等持院殿仁山妙義大居士とも。京都では等持院殿、関東（鎌倉）では長寿寺殿。足利尊氏の墓所は京都市北区の萬年山等持院と鎌倉市山ノ内の宝亀山長寿寺に存する。大慧派の中巖円月（仏種慧濟禪師、一三〇〇—一三七五）の『東海一漚別集』「拈香」の「長寿寺殿忌日拈香」に「大日本国平安城檀林禪寺住持比丘尼某甲、伏値故大檀那長寿寺殿最初月忌之辰、送淨財、入_レ在城等持禪寺、齋_レ現前清衆、借_レ手於山野、燒_レ此宝香。（中略）恭惟、長寿寺殿、天生廓恢、人服雅量、創業垂統、陰隲子孫。（中略）畢竟如何是長寿寺殿真實行履処」（五山新集四・五三四頁）とあり、『中岩月和尚自歷譜』「延文四年己亥」の項にも「出京、官使留在等持寺、結夏、為_レ追修長寿寺殿小祥忌」（五山新集四・六二六頁）とある。

長寿寺：山号は宝亀山。鎌倉市山ノ内亀ヶ谷坂（国史跡）北口の險要の地にある。開山は建長寺三八世となった幻住派の古先印元（正宗広智禪師、一二九五—一三七四）であり、生前の足利尊氏とは親交が深かった。印元は薩摩（鹿児島県）の藤氏の出身で、幼くして鎌倉に到つて大覚派の桃溪徳悟（広覚禪師、一二四〇—一三〇六）に就いて得度し

た後、入元して幻住派祖の中峰明本（幻住老人、普応国師、一二六三—一三二三）の法を嗣いでいる。『長寿寺文書』によると、建武三年（二三三六）八月二十九日すでに長寿寺が相模（神奈川県）の諸山に列していることから、尊氏自身が生前に開創して印元を開山に拝請したものでらしい。「古先和尚行状」に「六十四歳、左武衛將軍、建長寿寺、命師為開山祖師。（中略）師晚年養老於長寿、而不倦、乘徒接化、貴官頂謁、以寛撫物、以恵救孤」（統群類九下・六〇九a）とあり、左武衛將軍（左兵衛督）で鎌倉公方の足利基氏（入間川殿、一三四〇—一三六七）が尊氏の逝去した北朝の延文三年（一三五八）に改めて六四歳の印元を長寿寺開山に拝請したと解される。建長寺三八世を退いて後、印元は長寿寺に閑居して老いを養ったとされる。境内には尊氏の遺髪を納めたとされる五輪塔が存する。本尊は観音菩薩。足利尊氏と古先印元の木造坐像も安置されている。平成一八年（二〇〇六）に本堂を改築した。鎌倉建長寺には『長寿寺略記』一卷と『長寿寺殿伝記』一卷が所蔵されている。

尊真：尊い真影。ここでは月洲が絵師に描かせた足利尊氏の肖像画をいう。おそらく足利尊氏生前の肖像画などをもとに模写したものである。新出「足利尊氏肖像画」には「天神像」と題する附帯文書が存し、画讀の内容に返り点とルビが付されている。いつ書かれたものかは明確でないが、かなり正確に読み熟しており、この附帯文書の撰者は画像讀の内容を十分に理解していたと見られる。天神像でないことも承知の上で、あえて「天神像」と表題を付けていることから、おそらく足利氏の権威が失墜した江戸初期の頃に足利尊氏の尊像であることを人目から隠す目的で「天神像」と書き残したものではなからうか。

足利尊氏を描いた中世の肖像画としては、ほかに広島県尾道市東久保町の転法輪山大乗院浄土寺（真言宗泉涌寺派）に尾道市重要文化財の絹本着色「足利尊氏將軍画像」一幅が存し、この寺には備後国の利生塔が建立されている。また大分県国東市国東町の太陽山安国寺（妙心寺派）には東帯姿の「木造足利尊氏坐像」一躯が存し、国の重要文化財に指定されている。この豊後安国寺の尊氏木造坐像はもと京都山科の地藏寺の所蔵であったが、地藏寺の廃寺に伴って豊後安国寺に移されたものである。

請讀：讀を請う。請贊とも。頂相（肖像画）や仏祖図・山水図などに讀語（贊語）を依頼する。例えば『円悟仏果禪師語録』巻二〇「真讀」に「丹霞仏智裕長老請讀」「華藏民長老請讀」（大正蔵四七・八〇七b～c）などが存する。

老拙：老僧、拙僧に同じ。禅僧の自称。わたし。『仏鑑禪師語録』巻三「仏鑑禪師法語」の「示受業覚上人」に「老拙自幼出家、十八上行脚、到处横草不拈、豎草不把、如今五十三也」（正統蔵二二・四六〇c）とあり、『無門開和尚語録』「小參」にも「師云、老拙亦有二偈、拈似諸人」（正統蔵二二〇・二六一a）とある。

本寺：その寺。末寺に対する本寺の意味ではない。ここでは備前西祖寺のことを指している。『勅修百丈清規』巻三「退院」に「若留本寺」居東堂、相断住持者、須当尽礼温存」（大正蔵四八・一一二七a）とある。

供養：供え差し向ける。ものを供えめぐらす。諸々のものを供えて回向する。『師子林天和尚語録』巻一「普説」の「冬至節筭義上人集諸禅友請普説」に「如今、在師子林中、合為諸人別作供養。諸人

既識 師子林、還識 老僧 麼」(正統藏二二・四一三b)とある。

龍集：歳次と同じ。龍は木星(太歳)のこと、集は星の宿り。木星が一年に天空を一次だけ移り、もとの宿りに戻ることから、一年を龍集といい、紀年の語に用いる。『楚石禪師語録』卷二〇「禪著」の「大悲像記」に「龍集己丑至正九年春、住持梵琦撰」(正統藏二二・四一四五a)とある。「禪林墨蹟拾遺(日本篇)」の伯英惠備「165南溪雅号偈」においても「応永龍集壬午仲秋上澣」と記し、やはり龍集の語を用いている。

康応丁卯之秋：康応年間(一三八九—一三九〇)は南北朝合一直前の北朝年号。嘉慶三年(一三八九)己巳二月九日に康応と改元したが、僅か一年後の康応二年(一三九〇)庚午三月二六日に明德と改元している。康応年間には丁卯の歳は存しておらず、嘉慶元年(一三八七)が丁卯の歳に当たりますが、この歳は至徳四年八月二三日に嘉慶と改元されているから、それ以降の秋に揮毫されたものということになろうか。おそらく原本には単に「丁卯之秋」とのみ記されていたものを、複写頂相を作成する段階で至徳や嘉慶の年号を用いず、康応の年号を遡らせて表記したものであろうか。嘉慶元年丁卯の秋であれば、尊氏が没して三十回忌に肖像画と讚が作製されたことになる。一方、康応の秋であれば、康応元年(一三八九)の秋が該当し、翌年に三十三回忌を目前にして尊氏の肖像画と讚が作製されたことになろう。ちなみに本肖像画には天和二年(一六八二)に記された付帯文書一紙が存しており、そこに「康応、後小松院御宇。丁卯二当嘉慶元年也。一、康応元年ナレハ、己巳ノ年ニ当リシ。嘉慶元年ヨリ天和二壬戌年迄、二百九十七年ニ成ル也。一、康応ノ年号ヨリ考ス、天和二壬戌年迄、

二百九十五年ニ成ル也。康応ノ年号ハ一年也。一、年号トエトト相違故、如此ニ候。年号ハ能クエト違申ス、如何被存候。能々御考可被成候。己上」と記されている。

逢春：春に逢う。春に出会う。北宋代に蘇麟(生没年未詳)が范仲淹(字は希文、諡は文正、九九九—一〇五二)に献じた「断句」の詩に「近水楼臺先得月、向陽花木早逢春」とある語句に基づく。俞文豹(字は文蔚)の「清夜録」などに載る。水辺の楼台では真つ先に月が映じ、日の光に面した花木には早々と春が訪れる。『元菴和尚語録』卷中「住巨福山建長興国禪寺語録」の「陞座祝聖」に「進云、茲辰国公殿親臨拱聽法要、必竟如何指示。師云、近水楼臺先得月、向陽花木早逢春」(正統藏二二・三八d)とあり、『古林和尚語録』卷一「再住開元禪寺語録」の「歳旦上堂」にも「元正啓祚、万物咸新。近水楼臺先得月、向陽花木早逢春」(正統藏二二・三二・三三b)とあって、「得月」と「逢春」が対で示されている。

逢春閣：北朝の貞治三年(一三六四)に鎌倉建長寺に創建された中国風の二階楼閣客殿。五〇年後の応永二年(一四一四)に火災で焼失したとされる。『扶桑五山記』三「建長寺境致」に「高山、祖塔之門。得月楼・逢春閣・龍王殿、方丈之後」とあり、「和漢禪利次第」「相陽巨福山建長興国禪寺」の「境致」にも「高山・得月楼・逢春閣・龍王殿、方丈之後」と記される。「仏観禪師行状」に「受枢府鈞命、赴相陽建長寺。(中略)到師開堂日、衆議水消、持以送之。師掛之說法。此日台旃入山、歛官聽。本末有文室再興、便施莊田、為之建立。今造功已畢。得月楼、逢春閣、翼然聳空」(統群類九下・五九七b、五九八a)とあるから、夢窓派の青山慈永(士永、仏観禪師、

一三〇二—一三六九）が建長寺に住持した際、得月楼とともに逢春閣を建立したことが知られる。建長寺に所蔵される創建時の伽藍古図「元弘の指図」には逢春閣は描かれていないが、慈永が再興した方丈の右上に逢春閣が加わる。中国の園林を日本的に換骨奪胎した瀟洒な景観であつたらしい。石原彩子「鎌倉地方の史的庭園における築造技術に関する研究—建長寺方丈庭園の変遷について—」（『土木史研究』第二〇号、二〇〇〇年）や鈴木亘「中世における建長寺方丈について」（『建築史学』第五二号、二〇〇九年三月）を参照。

建長：相模（神奈川県）鎌倉山之内（鎌倉市山ノ内）に存する巨福山建長興国禅寺のこと。鎌倉五山の第一位。建長元年（一二四九）に執権北条時頼によって創建され、大覚派の蘭溪道隆（大覚禅師）を開山とする。兀庵普寧・大休正念・無学祖元・一山一寧・西澗子曇・東明慧日など著名な渡來僧が相次いで住持し、鎌倉禅の発展に大きな貢献を果たした。六条有房（法名は有真、一二五一—一三一九）の作とされる『野守鏡』に「禅宗の諸国に流布することは、関東に建長寺を建てられしゆへ也」とあり、聖一派の無住道暎（一円房、一二二六—一三二二）の『雑談集』にも「ことに隆老、唐僧にて、建長寺、宋朝の如く作法行はれしより後、天下に禅院の作法、流布せり」と記され、蘭溪道隆によつて本格的な宋朝禅の規矩が建長寺に導入された。永仁元年（一二九三）に震災で伽藍が焼失したが、正安二年（一三〇〇）に再建されている。『扶桑五山記』三「建長寺住持位次」には「五十九、伯英禾上、諱徳俊。嗣了堂」とある。惠儒が建長寺に住持していたとき、幻住派の南英周宗（懶雲、一三六三—一四三八）が蔵主を務めている。

住山比丘：住山は山に住すること、住持・住職の意。比丘はビクシュ Dharma の音写。乞食者。修行者。出家受戒した男子。『如浄和尚語録』卷末「後序」に「紹定戊子中秋、天衣住山比丘文蔚謹跋」（大正蔵四八・二三三a）とあり、『月江和尚語録』卷上「育王月江和尚語録叙」にも「至元六年庚辰歳三月、龍翔住山比丘大訶拜書」（卍統蔵一三三・一〇九b）とある。

惠儒：臨済宗大覚派の伯英惠儒（青丘遺老、？—一四〇三）のこと。法諱は徳儒・徳俊とも。武蔵の人。俗姓は未詳。久しく鎌倉建長寺で大覚派の了堂素安（本覚禅師、一二九二—一三六〇）のもとに参学しており、蘭溪道隆—同源道本—了堂素安—伯英惠儒という系譜を嗣承している。貞治年間（一二六二—一二六七）に同門の大年祥登（？—一四〇八）とともに元代最末期に入元する。明州（浙江省）鄞県の天童山景德寺に上つて松源派の了堂唯一（惟一とも、芥室）のもとに投じ、会下で蔵主の要職を務める。永和二年（一二七六）に祥登とともに明国から帰国し、建長寺に戻つて前堂首座まで勤め、蘭溪道隆を祀る西來庵の塔主となる。鎌倉浄妙寺に出世開堂し、円覚寺五〇世や建長寺六〇世を経て京都天龍寺二六世に遷住し、応永二年（一三九五）冬に南禅寺五三世に陞住する。応永四年に南禅寺住持を退いて寺内に大寧院を構える。応永一〇年（一四〇三）八月二日に示寂。南禅寺山内の大寧院に塔する。遺偈は「生死涅槃、全不相干、須彌踰跳、虚空展顔」という。ちなみに鎌倉建長寺の西外門の華蔵院も惠儒の塔所である。惠儒には『伯英儒禅師疏』（『萬松稿』とも）のほか、『建長寺円鑑図紀実』が伝えられる。円覚寺に移されていた蘭溪道隆ゆかりの円鑑を建長寺に持ち帰った顛末を書き残している。惠儒の法を嗣

いだ高弟には土峰元壯（大江）・無為祥字らが存する。『延宝伝燈録』卷一七「京兆南禅伯英徳俊禅師」の章や『本朝高僧伝』卷三六「京兆南禅寺沙門徳俊伝」に伝が存する。ただし、新出「足利尊氏肖像画」の讀は惠儒の他の古文書の筆跡から見て自筆とは認められないとされ、十四世紀末に惠儒が実際に讀した原本「足利尊氏肖像画」を十五世紀半ば頃に至って複写したものが新出「足利尊氏肖像画」とその讀語と見られている。京都市西京区大原野上里南ノ町の瑞光山喜春庵は南禅寺五三世の伯英徳俊（惠儒）を開山とし、応仁二年（一四六八）に性庵□裏により創建されている。鎌倉国宝館には室町時代作の伝伯英徳俊（惠儒）木造坐像一軀（平常展示）が所蔵されている。田山方南編『禅林墨蹟拾遺（日本篇）』に「165南溪雅号偈」として惠儒の墨蹟が収められており、そこでも「前南禅伯英叟惠儒」として徳俊ではなく惠儒の法諱を用いている。ただし、新出「足利尊氏肖像画」の讀語とは明らかに筆蹟が違っており、新出「足利尊氏肖像画」は原本ではなく複写されたものであることを示している。ちなみに伯英惠儒（徳俊）と似た名前の禅者に曹洞宗通幻派の英仲法俊（一三四〇—

一四一六）が存している。『続扶桑禅林僧宝伝』卷三「永谷英仲俊禅師伝」や『延宝伝燈録』卷八「丹州永谷山円通寺英仲法俊禅師」の章、『本朝高僧伝』卷三九「丹州永谷山円通寺沙門法俊伝」などによれば、法俊は足利尊氏の季子として暦応三年（一三四〇）五月二日に生まれ、幼くして京都天龍寺の夢窓疎石のもとに投じて童行（童子行者）となつている。疎石の示寂に伴って京都五山を離れ、やがて丹波（兵庫県）青原山永澤寺で通幻下の天真自性（？—一四二三）に参じて法を嗣ぎ、曹洞禅者として活動している。後に法俊は三代將軍の足利義満の帰依を得て丹波（兵庫県丹波市氷上町）の永谷山円通寺（円通興国禅寺）の開山に迎えられており、応永二三年（一四一六）二月二六日に世寿七七歳で示寂している。法俊はほぼ大覚派の惠儒（徳俊）と同世代を生きた曹洞禅者であつたことになろう。

敬讚：敬賛とも。敬んで讚す。礼を尽くして讚語を付する。『虚堂和尚語録』卷一〇「虚堂和尚新添」の「龐居士闍家都去」に「紹定四年清明日、住嘉禾興聖智愚、為妙源侍者敬賛」（大正蔵四七・一〇六二b）とある。

〈キーワード〉足利尊氏、長寿寺殿、伯英惠儒、臨済宗大覚派、建長寺逢春閣、備前西祖寺、月洲和尚

〔付記〕本稿を作成するに当たり、古美術白水（東京都港区芝公園）の寺崎正氏、馬事文化財団（神奈川県横浜市中央区根岸）参与の長塚孝氏、高橋平山堂様（東京都港区芝公園）には、関連史料の閲覧や掲載許可など種々の御便宜を頂いた。ここに記して御礼申し上げます次第である。